

テーマ 少子化時代におけるまちづくり

このテーマ掲げた理由について、私の住んでいる大分県について考えてみる。大分県は全国的に見ても高齢化率の高い地域であり、過疎化などの問題を抱えている。最近では夫婦の共働きなどで多くの子供を一日中みていることも難しくなり、高齢化問題に対応するために出生率を急に上げるというのは無理な話である。このように生活習慣は昔に比べても変わってきていることが多い。また、2050年にはこのままで行くと日本の人口は約半分になっているという。それに引き換え、商業施設は広域化の一途をたどっており居住環境もますます郊外へと広がっている傾向にあると感じる。

上記のような、少子高齢化や商業施設の広域化にどのように対応していけばよいか自分なりに意見を出してみた。

まず、それらを踏まえて私が想像する未来は、さびれた住居が広範囲にわたっており、その住居は通勤や通学考えても不便で住む人もまばら。人口も半分になったことも手伝いその場所の『手入れ』がおろそかになり、点在した家や『人工的な線や面』が目立つといったものを想像してしまう。

そのような想像が現実となってしまうのはやはり寂しい気がする。しかし、幼い頃創造していた未来というのはどのようなものだろう？高い住居とその下には緑がたくさんあった気がする。このような想像は世代や住む場所で千差万別だと思うが道路や工場が少なくとも今よりもつくられているはずの未来ではあるが、数多くの水や木は想像の中に存在するのではないだろうか。やはり人間が考える普遍的な美というのは『自然』というものにあるように思えてならない。

幼い頃の考えた未来にすることはたしかにむずかしいとわかる。しかし、この『自然』と言うのを少しずつ取り入れてみるというのは出来るのでは、と感じる。『自然』といっても山川草木等を指す意味や、その本来の形・性質が破壊されたりゆがめられたりしていない状態等の意味等がある。山川草木の要素を取り入れるというのは現在、街路樹や植林などで意識されている場面が多いだろう。後者の要素はまだまだ取り入れられていることが少ないように思える。後者の意味をもう少し詳しく述べてみると、要するに見た目が自然かということだ。先ほど述べた幼い頃想像した未来の中に『人工的な線や面』があるだろうか？あるいは、現在よりも多いだろうか？その『人工的な線や面』というのは自然なのだろうか？そう考えたときに、私はそうではないとおもう。ということは街路樹のように綺麗に並んでいれば統一美として美しく見られるだろうがあまり多くの植物を生い茂らせると人工的な直線が浮いてしまうよ

うに思う。人工物から人工的な線や面を取り除いたらそれはまとまるのではないかと私はかんがえた。

先にのべた『広域化』をくいとめるというのは現在の社会からいってむずかしいようにおもえる。そこで提案としては、人工的な線や面などの人工的な形を減らし、自然ゆたかなまちにするというものだ。郊外へ広がっていく、住宅、道、商業施設から、『人工的な線や面』を減らしたことを曲線的なものを想像してみると、自然の中に人工的な形が減って、今よりも自然と建造物の調和が取れ、見た目においても自然と都市が共生できるのではないかと感じる。すなわち、それは、人口が減り、広域化されて空き地のふえた未来で再びその場所に植樹を行えばより自然な環境がそこには生まれる。するとどうだろう？ 夢見た未来に近づくのではないだろうか？ もちろんそのためには空き地に植樹をしたりと数多くの手間はかかるが、ひろがった市街地に人工物が目立つといったものよりは数段良いことだと感じる。

しかし、住民が自分の住んでいる場所を好きになるというのはそれだけでは出来ない。その地域の文化や伝統というのが必要条件となる。画一的なものではどこでも良いという風になるのであろう。そうならない為にも人工的な線や面を無くすというほかに、その曲線とと曲線の間を生じるスペースなどに、それぞれの地域で人々がどのような暮らしをされているかなどを表現する場や憩いの場として有効に活用し、この提案を活用する場合においても、地域の伝統や文化やその町の雰囲気や織り込まれたコンセプトをつくりそのコンセプトにしたがって活用することで、地域の人同士のつながりや、統一感のある緑豊かなまちができるのではないかと感じる。

19世紀の後半から科学や工業が発達し、人間は加速度的に自然を破壊してきた。そのしっぺ返しは地球温暖化などで徐々に形をあらわしている。自然が人間にあわせることはない。これからの未来は、自然と人間と人間の文化がうまく共生できるように人間が努力しなければならない。その努力を好んで人間がするように『自然がはえるまちづくり』をする必要があるのではないかと感じる。